

■緑陰に育つ絵どころ

私の絵の授業は、前期、教室を飛び出し新緑の中、学内の風景を求めて展開します。

東に春日奥山あり、山裾のゆるい起伏のある学内は変化に富み、風景画のモチーフがそこ、ここに見られます。この植栽・樹木はいわば人工林ですが、背の低い構造物ともよく馴染んで、落ち着いた日常の風情があるものです。それでも、何だ、どこがいのだといふかる方たちもおありかと思いますが、身辺のごくありふれた生活空間の中にも絵になる場所はたくさんあります。

絵ハガキにあるような美しい観光名所は反って絵ににくいもので、どんな場面でも構図の組み立てが鍵となるのです。この空間を絵に取り込む工夫があれば学生各人の造形学習はそれぞれに成立します。

美術・図工の基礎的展開で大切なことは「自然に学ぶ」「自然から感得する」とこととしています。造形の構成要素は多く自然の構造の中にあり、私達との出会いを待っているかのようなのです。その探求を絵画実技演習の視点から、油彩・水彩による「風景画」制作を恵まれた環境を生かしてやっているわけです。画材にまず慣れ、また構図感覚を練磨し、技法学習面から、美術・図工のスタート・ラインとしています。



木洩れ日が眩しい野外制作

一見何処にでも有りそうな授業ですが、入学してくる学生たちが小中高等学校時代を通じて風景画にあまり親しめていない今日の事情もあり、放牧にならぬよう、また簡単に流さない工夫を加えています。

■浮世絵の衝撃

ここで参考になっているのが、広重や北斎の浮世絵



美術科教育講座・教授
比留間良介

版画なのです。日本の浮世絵が印象派を始めとする十九世紀末の西欧美術に与えた大きな衝撃は、ジャポニズムとして有名ですが、明治以降、日本の美術はこれを逆輸入した感があります。

ゴッホは広重の「名所江戸百景 亀戸梅屋舗」を碁盤の目のように罫線を引き、丹念に模写してその画面構成の大胆さを学んでいますので、ここでの絵



ゴッホ 日本趣味:梅の花 (広重写し)

画学習課題は今もなお、有効であるといえます。風景画制作は遠景・中景・近景と漠然と並べがちのところを、近景を巧みに配置する江戸浮世絵師の工夫の斬新さに印象派の画家たちと同様、平成の私達が改めて学んで授業に活かしているわけです。

■ど近絵画は楽しい

風景画では自分の立つ位置や視点の在り処をより明確にさせて臨む必要があり、一人ひとりと構図スケッチメモを前にして「視点はどこか」の問答となります。その上に、近景を強調することが加わって多くの学生の画面は大胆な意匠性を持ちはじめます。目の前に立ちはだかるものも計算に入れたの奥行き表現となり、強調を解かり易くする意味で、少々品のない表現ですが「ど」近景といって理解してもらっているのですが、学生諸君は「どきん」「どきん」といって楽しんで描いてくれているようです。

こうした経験がまた次の世代に引き継がれて、より多くの子どもたちが絵を楽しんでくれることを願っています。